

令和6年度犯罪被害者週間「県民のつどい」

- 日 時 令和6年11月2日（土）
13:30～16:10
- 場 所 あきた芸術劇場ミルハス
小ホール・創作室
- 参加者 137人
- 司会者 綿引かおる（フリーアナウンサー）

犯罪被害者週間
11月25日～12月1日
「県民のつどい」



犯罪被害者等支援シンボルマーク
ギョつとちゃん

1 あいさつ

○ 秋田県副知事 神部 秀行（主催）

関係者の皆様には、「県民のつどい」の開催にあたり大変御協力を賜り、ありがとうございます。

また、日頃より犯罪被害に遭われた方の支援活動に御尽力頂いておりますことに、感謝申し上げます。

今年6月に悲願でありました犯罪被害者等給付金の大幅な引き上げが実現いたしました。

犯罪被害に遭われた方は、犯罪によって傷つけられるだけではなく、心身の不調、経済的な負担といった様々な問題を負うことになります。

そういった意味で、支援金の充実は必要不可欠であり、大変よかったですと思います。

こうした制度、体制が実現できたのも、「県民のつどい」のように、全国各地でこういった場が設けられ、多くの方々が声を上げてくれたことが、成果に繋がったものと存じます。

犯罪被害者の方は、もう触れたくもないその過去について勇気を振り絞って明らかにしていただいております。

その声を無駄にすることなく社会に生かしていく、これがとても大切なことだと思っております。

昨年のこのつどいで、お子さんを亡くされたお母さんの「子供を失って生活の全てが変わった」という言葉、あるいは犯罪によってお父さんを亡くされたお子さんの「誕生日や運動会、クリスマスといった世の中の楽しい行事は全て苦しみになった」と



という言葉、あるいは、「今日という日はありがたい」といった言葉にたくさん触れました。

胸が締め付けられるような思いでありました。

本日は、犯罪被害に遭われた方に寄せる思いを小・中学生が手紙にして朗読していただくことになっておりますし、その後は、殺人事件によって大切な御家族を亡くされて、全国各地で講演会活動や地元長野で犯罪被害者遺族の方々の自助グループの世話人活動をしておられます市川武範さんから御講演いただくことになっております。

このつどいが、犯罪被害に遭われた方の声を社会全体で受け止めて、支援についてその大切さを考える、その輪が大きく広がっていく機会となりますことを願い、そして、誰もが安心して暮らせる社会が実現することを願って、開会の言葉とさせていただきます。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

○ 秋田県警察本部長 山本 哲也（共催）

皆様には、平素から警察活動の各般にわたり、深い御理解と御協力を賜っておりますことに対しまして、この場をお借りして御礼申し上げます。

安全で安心して暮らせる社会の実現は全ての県民の願いであり、県警察では、関係機関・団体と連携して、犯罪や交通事故の未然防止に向けた様々な活動を推進しています。

当県の人口10万人当たりの刑法犯認知件数は、全国でも最も少ない水準にあります。最近では性犯罪の被害が増加傾向にあります。

そしてご承知のとおり、一たび犯罪や交通事故の被害に遭いますと直接的な被害にとどまらず、御家族を含め長期間にわたり様々な困難に直面することになり、実際に被害に遭われた方々からは、更なる支援の充実を求める切実な声が寄せられ、先般、国では、犯罪被害給付制度の抜本的強化や地方における途切れない支援の提供体制の強化、犯罪被害者等のための制度の拡充などに取り組んでいくことを決定しているところです。

被害に遭われた方々等と最も密接に関わる県警察におきましては、支援に関わる機関・団体と足並みをそろえて、被害に遭われた方々等の視点に立って、より良い、途切れない支援が提供できるようしっかりと取り組んでいく所存であります。皆様におかれましては、どうぞこれまで以上の御理解、御協力をよろしくお願いいたします。

結びに、犯罪被害者支援の重要性が県民に広く浸透し、被害に遭われた方々等への配慮と協力がなされることを社会環境づくりが一層推進されることを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。



○ 秋田県議会議長 北林 丈正 氏（来賓）

犯罪被害者週間「県民のつどい」の開催に当たり、県議会を代表しまして、御挨拶を申し上げます。

本日、御出席の皆様には、日頃より、犯罪被害者への支援につきまして、深い御理解と御協力を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、刑法犯の認知件数は、全国的に減少傾向でありましたが、コロナ禍が収束した令和4年、5年と、2年続けて前年を上回るなど、予断を許さない状況であります。

中でも、最近は、SNS等をきっかけとして犯罪に加担してしまう、「闇バイト」と呼ばれる行為が多発しており、首都圏では、殺人・強盗といった重要犯罪が発生しております。

いとも簡単に犯罪に手を染めてしまう現代の状況に驚きを覚えますし、何の落ち度もない市民が犯罪の被害者となってしまう、そのような理不尽な犯罪報道に接する度に、胸が締め付けられる思いであります。

犯罪の被害に遭われた御本人やその御家族、御遺族には、犯罪による直接的な被害に加え、再び被害に遭うのではないかとという恐怖や不安感・喪失感といった心理面への影響や、体調不良などの身体的影響のほか、社会的・経済的な面においても、様々な困難が降りかかっており、大変な御苦労をされているものと存じます。

このような方々が、以前の平穏な生活に戻るためには、関係機関の支援はもとより、社会全体での多岐にわたるバックアップが何よりも肝要であります。

誰もが犯罪被害者になりうる今日、犯罪による被害を、自分には無縁だと受け止めるのではなく、私たちが暮らす社会全体の問題として捉え、どのような支援ができるのかを、真摯に考えていかなければなりません。

本日の「県民のつどい」では、犯罪の被害に遭われた方々に関するパネルが展示され、また、御遺族による御講演が予定されていると伺っております。

被害を受けられた方や御家族が、想像を絶するような、つらく、苦しい経験を、勇気を振り絞って私たちに伝えてくださる、この貴重な機会は、同じような被害者や加害者を生み出さない社会の構築と、被害者支援の輪の更なる広がりにつながるものであると確信しております。

県議会といたしましても、被害を受け苦しむ方々の傷ついた心に寄り添い、適切な配慮と支援が行われる社会の実現に向け、引き続き、努力を重ねてまいります。

結びに、本日の「県民のつどい」が犯罪被害者の福祉向上に向け、実り多きものとなりますよう御祈念申し上げますとともに、御出席の皆様の御健勝と御多幸をお祈り申し上げ、挨拶いたします。



2 来賓等紹介

- 秋 田 県 公 安 委 員 会 委 員 長 渡 部 克 宏 氏
- 秋 田 県 教 育 委 員 会 教 育 長 安 田 浩 幸 氏
- 公益社団法人秋田被害者支援センター理事長 齋 藤 和 樹 （共催）

3 「命の大切さ学習教室」に参加した児童・生徒による手紙の朗読

命の大切さ学習教室に参加した
児童・生徒による手紙の朗読



＜朗読していただいた児童・生徒＞

- | | |
|----------------|-----------|
| ○ 横手市立醍醐小学校5年 | 菊地 優華 さん |
| ○ 鹿角市立十和田小学校6年 | 竹田 虹胡 さん |
| ○ 仙北市立神代中学校3年 | 佐藤 亜耶希 さん |
| ○ 能代市立淳城西小学校5年 | 佐藤 萌夏 さん |
| ○ 湯沢市立湯沢東小学校6年 | 佐々木 榛 さん |
| ○ 湯沢市立湯沢北中学校1年 | 西野 結夏 さん |

4 講演

<演題>

『居場所を奪われた犯罪被害者』

<講師>

長野県犯罪被害者遺族自助グループ「つむぐ」世話人

「新全国犯罪被害者の会（新あすの会）」会員

犯罪被害者遺族 市川 武範 氏

私たち人間は、一人では生きていけません。
とても弱い動物です。
なので、集団生活を送っております。
個を大切にしながらも、集団を維持するには
決まり事が必要です。

1 番は憲法です。

2 番は法律です。

3 番目は、各自治体に制定を国が求めている
もの、条例なんですよ。

時に条例は、法律よりも優先して適用され、運用されるほど力の強い決まりごと
なんです。

2004年12月に犯罪被害者基本法が制定されて20年、奇しくも、その20
04年が、直人がこの世に生を受けた年です。

20年も経って、本年ようやく全都道府県単位で条例が制定されましたが、市町
村単位ではまだまだです。

秋田県では、県も全自治体も条例を制定しておられるとのこと、住民を守る自治
体の姿が見て取れます。

素晴らしい姿勢だと思います。

本日のように、犯罪被害に特化した人権の集いを行われていることに敬意を表し
ております。

長野県では、4年前の事件が起きたときは、県も各自治体も0、今は60弱です。

北海道に次いで全国で2番目に自治体の数の多い長野県は77の市町村がありま
すが、そのうち、1つの自治体の長は、「5年前の台風での被害でも対応できたから
必要ない。」と言っていました。

今年秋になって、何度も説得を受け、条例を制定することにしたそうですが、私
にとっては勉強不足と言わざるを得ません。

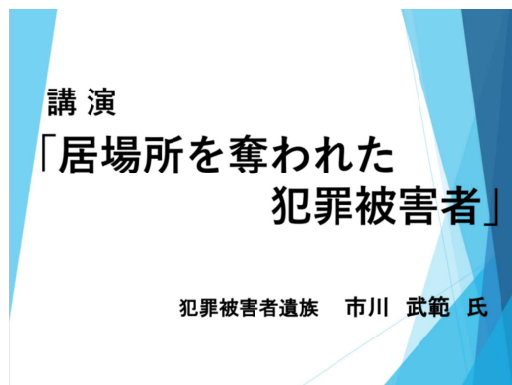
何故か。

国は、被害者支援に必要だから法を作った。

それだけで、制定理由は十分ではありませんか。

「うちでは事件、事故の相談がない」と言って不要としたり、自然災害と同じと
思っていたり、未だに制定しないのは行政の怠慢と言わざるを得ません。

事件のあった坂城町でも、5年前に台風の被災者が出ました。



町は積極的に支援活動に職員を動員しましたが、私のうちの銃撃事件ではどうだったのでしょうか。声を掛けてくれないどころか、住民票移動を伴う転居を警察を通して言ってきたのです。

一時避難なのに住民票を移す。

引っ越しじゃないですか。

「出て行け」と言われたと受け止めました。

9月に坂城町条例ができた後は、支援内容ができてきましたが、条例がなかったときの事件直後のことから、思い出してお話をしたいと思います。

スクリーンに映し出されている2人は、亡くなった次男の直人と長女の杏菜の幼い頃の写真です。

7歳も離れているせいか、杏菜は直人の母親代わりのようなものでした。

宿題を教わるのも「姉ちゃん」と呼び、お年玉やお小遣いの管理も杏菜に頼んでいました。

ママではなく、「姉ちゃん」だったんです。

杏菜の机の引き出しには、今も直人のお小遣帳とその金額がきちんと保管されています。

私は未だにその引き出しを、机を整理整頓、片付けを出来ずにいます。

できれば、「そのままの形で残しておきたい、残しておいてあげたい」そんな現状です。

直人は、小学高学年のクラブは、3年間太鼓クラブに所属し、毎年坂城町の夏祭りでは太鼓演奏をステージで発表していました。

そんな直人の太鼓のバチを持って、これからステージ発表に向かう、その姿を杏菜が見守っている。

そんな2人の関係象徴するような、とても大切な1枚の写真を持っています。

杏菜が直人を見守ってくれていました。

この時に、杏菜が来ているTシャツを今は妻が着ています。

もうシミだらけで、首回りが伸びてだらだら皺だらけ、すり切れているのですが、平気な顔をして着ています。

大切にとっておくよりも、着続けることで、いつまでも一緒にいる気持ちでいたいのでしょう。

いつになっても、いつまでも家の片付けは進みません。

「進ませることができない」と言います。

さらに、2人をどんどん失っていくようで、辛い作業です。

坂城銃撃事件の半年ほど前、杏菜が手話で「私の名前は市川です」と言いました。

私も手話で「私の名前も市川です」と返しました。

「え、何それ」と杏菜が聞いてきました。



「杏菜の知らない手話があるんだ」と私。

手話には1つの言語を表すのに複数の表現する形があるんです。

「これ1本で、市川を表すんだってよ」と私。

「ふーん」と杏菜。

杏菜は小学校高学年のクラブで、手話クラブや点字クラブに入っていたんです。

成人してから聞くと「点字は難しくて忘れちゃったけど、手話なら覚えている」と言っていたので、試してみた父娘のコミュニケーションの一コマです。

きっと、誰かのために何かをしたいとか、人の役に立ちたいと、そういうようなことでも思いがあったから選んだクラブだったのでしょう。

優しい思いに溢れた子でした。

懐かしい思い出です。

この時の手話でのやり取りは、杏菜と交わした最後の手話の会話になってしまいました。

皆様のお手元に配付されております資料に、
私の手記2種類を入れさせていただいております。

お帰りになったときにでも読んでいただくと有難く存じます。

ネットでも公開されていたりもしますので、
紹介をしていただいても有難いなと思っております。



ネットと言いますと、新全国犯罪被害者の会、通称「新あすの会」という団体の創立大会が、一昨年3月に東京で開催されました。

その場で、遺族となってしまった私の思いのたけを精一杯発表させていただいた原稿が、「新あすの会」のホームページのニューズレターからも引き出せるかもしれません。

その場で、私から国に要望した事柄が書いてあります。

2年前に、上川陽子議員、小泉進次郎議員、平沢勝栄議員の現与党の重鎮の前で国に要望したことが書かれておりますので、お読みいただければと思います。

そして、本年7月21日、東京において「第2回新あすの会全国大会シンポジウム」が開催されまして、そのセッションの場に、小泉進次郎議員、宮崎厚労副大臣（当時）、三谷衆院議員の現与党の3方が登壇され、中央でマイクを持っている小泉議員より、「今日、この会場に市川さんはいますか。」と名指しされ、立ち上がり、紹介されたので、挨拶をしました。

小泉議員はセッションの終了後、95歳になられた岡村代表に挨拶をされた後、まっすぐ私の席に来て、右手を差し出してくれました。

私は、立ち上がり、握手を力強くしましたが、小泉議員の左手は私の背後に温かくありました。

メディアのカメラの前で、カメラが撮り終えるまでずっと。
そんな出来事があったのです。

2年前、国に要望したことのいくつかが現実のものとなりましたが、でも一気に全部叶えるわけにもいかない。優先順位を付けて1号車が発車したところだと、今後、2号車、そして3号車と発車を継続して法を整えていくことを公言してくれたんです。

今年6月、法改正されました。

私の発言が、きっかけを作ったことを確信したと同時に、杏菜と直人の命が、法と共に生き続けていると思えたのです。

「人の役に立ちたい、人を笑顔にしたい。」、そんな2人の思いと共に、この法律は生きていくのです。

お陰様で、いろいろな方々から講演依頼などをいただいております。

本日は皆様にも共感していただけたらうれしいなという、そんなお話で進めさせていこうと思います。

令和2年5月26日深夜、自宅に暴力団幹部の男が侵入し、長女と次男が銃殺されました。

2人とも頭部を撃たれて翌朝亡くなりました。

男も自宅のリビングで頭部を撃ち自殺したとみられています。

加害者死亡のため真相は分かりません。

想像することしかできません。

被疑者死亡で書類送検され、この1件は処理されております。

警察に相談し、逮捕状が出ていながらも被害に遭ってしまった。

前日に自宅に現れていたのですから、パトカーの1台も置かれていれば、防げた事件です。

こちらからお願いしないと張り込みって警察はしてくれないのでしょうか。

私たち遺族にとって、それで終わりではありませんでした。

さらに辛い仕打ちが待っていました。

「なんで暴力団が来るんだ。」「組の関係者だ。」「対立していた。」とか、「元々危ない家の家族だったから。」「組の幹部が自殺って、よっぽどのことしでかしたんだな。」と、そんな風に第一印象を持たれた方も多かったのでは無いでしょうか。

マスコミも飛びつく、そんな衝撃的な事件と思われたのではないのでしょうか。

ちなみに、私の甥は警察官です。

友人知人にも警察官はたくさんいますが、反社と呼ばれる組織の親族は私の知る範囲では1人もいません。

危ない一家でしょうか。

話を事件翌日に戻します。

事件翌日の27日、早朝から私の携帯電話が鳴りっぱなし、報道機関からの問い

合わせ、友人知人から心配の声、「一体何があったのか、どういうことなのか。」など、それはこちらが聞きたいくらいでした。

現場となった自宅には戻れないため、警察の緊急宿泊制度により3日間の避難先を提供されました。

「3日だけ。」と思いましたが、その間に親戚などの頼れる避難先を探して欲しい旨、話をされました。「あー、そういうものなのか」と思うだけでした。

その避難先を見つけられずに、結果的に、2週間後に民間のアパートを借りることになりました。

風呂なし、洗濯機置き場なしです。

コインランドリーはお金が必要になるので無理、「洗濯は台所で水洗いかな。手で絞って室内干しになるのかな。」なんて考えていました。

公衆浴場に行かれる状態、心境ではなかったので、「絞ったタオルで体を拭くことになるのかな。」そう思っていました。

メディア報道を目にしたのは、5月28日が最初だったと思います。

新聞、テレビには、警察の事情聴取で話した事実とは違うことや表現のされ方、言い回しなどで違和感を覚えることが多かったです。

「犯人は1階の窓ガラスから侵入」、自宅は平屋建てで、もともと1階しかありません。

「犯人は玄関を叩いたら鍵が掛かっていたので隣の部屋の窓ガラスを割って侵入」、犯人は玄関など叩いていません。

いきなり金属バットでリビングの窓ガラスを叩き割って侵入してきたのです。

記事は間違っています。

犯人の名前に「さん」を付けた呼称が掲載されました。

既に逮捕状が出ていながらも見逃し、逮捕できないうちに起きた銃殺事件の犯人を「さん」付けでなんか呼んで欲しくないです。

長女の職業は「飲食店」、居酒屋レストランでしたから正しいですけれども、今度は、多くのネット住民から「キャバクラ嬢」と捉えた書き込みが多く、「写真を探してみたがない」とか、「見つけた」と言って、別人の顔写真だったりとか。

なぜそうなるのでしょうか。

このことは、報道の間違いではなく、報道を目にした方々への問題提起や注文となるのでしょう。

最も当時の私は、ネットの書き込みの捉え方の偏りに戸惑い、「飲食店以外の職業の言葉はないものか」と、そんなことを考えていました。

記者にそれを伺ったりもしました。

「3か月ぐらい前から、あるいは一年ぐらい前から白い車がうろついていて、私の長男に嫌がらせをしていた」という記事。

犯行に使われた車は、白いセダンでしたが、犯人自身が所有し、普段乗っていた車は白ではありません。

きっと逮捕されないよう仲間から借りて犯行に使った車の色が白かっただけです。

前日、自宅に現れた時も、白い車ではない別の色の犯人の車で現れたのです。
たまたま犯行に使われたのが白い車だった。

白い車なんて、営業車なども含めて普通にたくさん走っています。

取材を受けた近隣住民の思い込みだったのではないのでしょうか。

何より、長男は嫌がらせを受けていた事実は1回もありません。

事件2日前の5月24日、勤務先の会社の目の前にあるコンビニ駐車場で、同じ会社に勤める違う部署の気が合いそうな女性社員と話をしていたところに突然現れた見知らぬ大男。

身長は180から190センチの間、体重は100キロ近いレスラーのような髭面の大男に車を壊され、暴行を受け怪我をし、私とともに警察に被害届を出し、男には逮捕状が出ていました。

男は女性社員の離婚している元夫でした。

その元夫が犯人です。

ちなみに、長男はその女性社員の自宅も住所も携帯電話番号さえも知らない。

その程度の間柄です。

暴力団員と結婚した過去があるなんて知る由もない。

とばっちりもいいところです。

皆様もそうではありませんか。

自分の勤める会社の人が暴力団と関わりがあるなんて思ってもみないのではありませんか。

思い返してみてください。

時は新型コロナ渦、志村けん、岡江久美子といった有名人が亡くなり、長野県では、長野市の整骨院でクラスターが発生し、当時の長野市長が濃厚接触者と報じられ、世間ではマスク不足、体温計不足、「アベノマスク」と呼ばれるものが配布されました。

学校、会社は速やかに帰宅しなさい、そう言われていた時期です。

勤務先の前での店で話すことのどこがおかしいのでしょうか、もし交際していたら、そんな目立つ場所で話していますか。

目立たない場所で落ち合いませんか。

私だったらそうします。

そして、最大のとばっちりを受けたのは、銃殺されてしまった2人です。

こんな理不尽な形で、はてなき未来を奪われてしまった。

「捜査関係者によると、死亡した犯人と長男の間に女性を巡るトラブルがあった」という記事がありました。

捜査に携わって事実関係を知っている捜査員がそんなことを言うはずがありません。

何も知らない他部署の警察署員の言葉ではないかと私は思っています。

あまりにも無神経で、あまりにも無責任な発言であり、報道のされ方でもあると思います。

警察官にそう言われたら記者はその通り書いてしまいますよね。

「なんていう警察官がいたんだ」と思いました。

そして、そのせいで長男が可哀想すぎます。

何も悪いことなんてしていないのに。

「県警は家族も保護指定し、避難を勧めていたが、家族が断った」という報道。

24日に暴行を受け、25日に被害届を出し、その日の夕方に加害者が自宅に現れたことを受け、自宅がばれてしまっている。

それ故に長男は保護指定をされ、警察の保護下に避難しました。

私たち家族には、避難の提案はありましたが、保護対象に指定されず、警察と協議の上、被害を受ける危険性は少ないとのことで避難をしませんでした。

ちなみに、その時点で長男は保護指定されたにも関わらず、警察から言われたのは、「長男の避難先は自分で探してくれ。宿泊費は自分持ちで払ってくれ」でした。

私はてっきり、警察から提供してもらえるものだとばかり思っていましたので、正直驚いたのですが、「殺人事件のような凶悪犯罪でもなければ、こんなものなのか」という半ば諦めにも似た感じで受け止めていました。

「犯人が逮捕されたら、民事裁判でもして請求してくれ。」ということなのでしょう。

事件から半年以上がたった12月の下旬、Y o u T u b eで5月28日の夕方にNHK長野が放送した県内ニュースを発見しました。

そこには、「家族は保護対象ではないものの警察と協議の上、危険は迫っていないとの判断から避難しなかった」旨、正しく報道されていました。

つまり、事件直後の警察発表では、その部分の事実を言っていたのです。

報道機関によって、記者によって、こんなにも事実がねじ曲げられてしまうのか。他社メディアは肝心なところを省いていました。

この動画を見つけるまでは、メディアにも、そして警察の発表にも不信と不満でとても苦しかったです。

なにせ私たちは、記者会見の現場を知らないのですから。

「市川さんは外出中」と書かれました。

私は、26日は仕事をし、犯行時刻は帰宅しようとして車に乗り込むところでした。

警察の調書にはそう記されているはずなのに、何故報道では勤務先となっていないのだろうか、警察が「外出中」と発表したからです。

何で警察はそんな風に発表したんでしょう。

外出中でも間違いではないのですが、それを見聞きした皆さんはどう思いますか。

「こんな大変なときにどこをほつつき歩いているんだ。」「武範どこ行った。」

そんなネットの書き込みがその答えです。

被害者保護を意識した警察からの発表、記者会見や報道の文言が大切なのだと思います。

私の心が深く傷付いたのは言うまでもありません。

「長男と犯人の元妻は同僚」との報道。
同僚と聞くと、どう感じますか。
一緒に仕事をしていて仲良くなった。
その最たるものが職場恋愛であり、職場結婚ではありませんか。
そして、よくあることですが、スキャンダラスな連想をされやすい表現でもありました。
事実、そんなネットの書き込みが多かったです。

さらに、「元妻」という言葉、犯人目線の言葉です。
長男の目線にしてみれば、勤務先の他部署の女性社員です。
印象が変わると思いませんか。
紙面のサイズや放送時間の短縮のために簡略化されたのでしょうか。
それらの報道のされ方により、「長男が銃撃事件の原因」と受け取られてしまったように感じています。

しかも、尾ひれが付いて。
家には中傷の葉書が届き、長男と私が責められ、ネット上では「不倫関係にあった」とか、「犯人が死んで2人は邪魔者がいなくなって幸せになれる」だとか、もう様々な、ただの憶測から生まれたであろうことばかりが事実のように書き込まれました。

離婚していれば不倫とは言いませんし、そもそも、そんな事実はありません。
しかし、それを読まれた方は事実誤認をしてしまい、私たちは、同情されないどころか、非難をされてしまいました。

後日、それも半年も1年も経ってから事実を報道しても、なかなか浸透しませんでした。

それは「あの事件のことか」と読んでもらえなかったり、「どんな事件だったっけ」と過去のネットサイトを検索して、誤った過去の記事や書き込みの認識に戻されてしまうからです。

いかに、「最初の報道が大事で、責任が重いか」ということをメディアの皆様には改めて受け止めていただきたいと思っています。

それは、ネットサイトを立ち上げたり、書き込みをする方々も同じです。

報道機関によって、こんなにも違うという一例ですけれども、テレビで報道されたものです。

暴力団員35歳が杏菜と直人を殺害したことの矢印、そして、暴力団員から長男に向かって矢印の右横には「暴力団の元妻」と書かれ、「同じ会社（職場は別）」、長男の下に「事件時不在」と書かれていますが、長男は警察の保護下でしたから不在です。

このように正しく報道されているところがありました。



また、こんな報道のされ方もあります。

死亡、犯人の名前、そして長男「不在」、長男と犯人の矢印には、「トラブル」。

何のトラブルもないと先程申しましたが、「トラブル」と書かれてしまいました。

犯人と元妻の矢印には、「元夫婦」、長男と元妻は「同じ職場」。先程見ていただいた画像と印象が違いますか。

長男が悪者扱いの元になっていると捉えられます。



もう1つ。

これは新聞記事です。

ネットにも載りました。

左端に「犯人死亡」、そして、その右隣に長男「女性トラブルか」と書かれています。

もしかしたら、先程聞いて頂いた警察官の言葉をそのままこのようにしたのかもしれない。

何のトラブルもない。

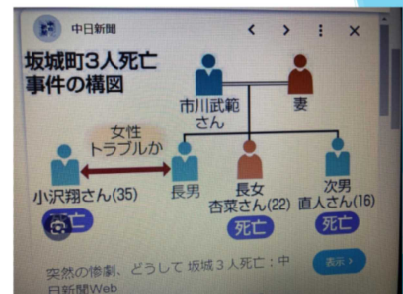
あったとすれば、「いきなり暴行された」ということですが、でも、女性トラブルではありません。

こんな報道をされてしまった。

これを正す方法がない。そんな状況でした。

今のような人物の関連図も正しく報道して欲しかったと思いますし、これからは正しく報道していく努力をメディアの皆様にしていただきたいと思います。

また、後に事実を知ったとしたら、自らネットサイトや書き込みを削除することを求めます。



関連することとして、こんなこともありました。

地元局のテレビ信州が、「チャンネル4」というドキュメンタリー番組を作って下さったんですが、その番組を見た方が、翌朝、私が当事者や遺族と知らずに、「テレビ見た。可哀想にね。」と言われました。

私が、「そうですね。」と言うと、すかさず隣にいた坂城町の住民の方が、「そんなもんしょうがねえじゃないか。長男が暴力団の妻を寝取ったんだから、そんなもん当たり前のことだ、やられて当たり前」と言いました。

私が、「でも被害者なんだから。」と言っても、「そんなの関係ねえさ、ヤクザの女に手出したんだから。」と話しました。

そうしたら、さっき「可哀想」と言ってくれた人も「あらそうだったの。それじゃあ仕方ないわね。」となってしまいました。

私は、自分の身元を隠していたので、それ以上何も言えませんでした。

悲しいですね、怖いことですよね。
間違った情報の書き込みは、まだ削除されていません。

「近所にも不審者に警戒するよう、注意喚起してくれれば防げた」と話す近所の60歳代の男性の言葉という記事がありました。

それは、その男性から私たちに対する「注意喚起しろ」との注文ですよね。

見ず知らずの男からいきなり暴行を受け、被害届を出したばかりの私たちに、近所へ注意喚起などできるはずもない。

「そんな時間がどこにあるのだろう。」「この人は一体何を言っているのだろうか。」「記事も何を書いているのか。」、まるで私たちが悪いと言っているようなものではありませんか。

近所の男性にも、メディアに対しても不満だらけでした。

しかも、「最初から男との面識はなかった」とその報道機関も流しているんです。

そして、新聞でもテレビでもそう報道されているではないですか。

読解力の低さを恥じて欲しい。

また、普段見かけない高級外車がうろついていたらその近隣住民の男性には通報して欲しかったです。

初期の報道の混乱は、ある程度仕方ないとも思っております。

しかし、日数が経過しても一向に訂正されず、「一体警察は何を発表しているんだろう」という疑問と不信感に苛まれておりました。

「妻は近所に逃げ込み助かった」そんな報道もありました。

妻は、「私は逃げたんじゃない」そう言って苦しみ、「私が撃たれていればよかった。」「目の前にいたのに助けてあげられなかった。」と悲しみ苦しみ続けている妻、足がすくみ、動けなくてもおかしくない切羽詰まった状況です。

でも妻は、玄関ドアの鍵を開け、助けを求めて外へ駆け出しました。

雨上がりの泥道をソックスのまま駆けて、近所に助けを求めた。

そして、犯行現場の自宅に戻って来たところで私と会ったのです。

逃げ込んでいますか。逃げてなんかいません。

怖い犯行現場に犯人が暴れているかもしれないその犯行現場に戻ってきたんです。たった1人。

2人の我が子を助けたい一心で。それを「逃げ込み助かった」とは何ですか。

そう報じたメディアからは謝罪していただきたい。怒りに満ちてしまっています。

「長男と犯人の元妻が同じ職場で働く仲」、それも2年経ってからの報道です。

もういい加減にしていただきたい。これ以上誤った報道で苦しい思いをさせないでいただきたい。被害者遺族にとっては、たった一言では済まされない、命を落とすことにも繋がりがねないセンシティブな事なのです。

「男は、長男の名を叫びながら次男を撃った」という記事。

男は金属バットで窓ガラスを叩き割り、拳銃を取り出しながら長男の名を叫びな

がら「どこだ。どこにいる。」と叫んでいたんです。

次男の直人を見たときに、「誰だてめえ」と叫び、銃口を直人に向けた。

直人を長男と間違えたわけではありません。

明らかに、別人と認識しながらも発砲しています。

この記事も間違っています。

私が出会ってきた記者の方々はとても真摯な姿勢で話を聞き、心を汲み取っていただいていたように思っていたのですが、いざ報道となったときに、何故このような被害者や遺族が辛い思いをすることになってしまうのでしょうか。

場合によっては、世間に発する前に当事者に確認するという作業が必要かもしれません。

つまり、誤った情報を正したい時に、さらに誤った報道をしない策を組んでいただきたいと強く思います。

国からの犯罪被害者給付金の見舞金は、2人分で約680万円でした。

事件から9か月後に支給されました。

自動車の自賠責保険とは、掛け金がありませんので、その性格は違うのかもしれませんが、「2人の命はその程度で済まされてしまうのか」という悲しみに包まれました。

ネット上にまたしても書き込みがされました。

「税金から支払うのだから贅沢なことを言うな。」「生命保険を掛けていなかったお前のせいだ、おまえの責任だ。」と。

被疑者死亡で損害賠償金も取れない。

仮に民事裁判を行うことができ、勝訴したとしても、加害者に支払い能力が無ければ支払われることもなく終わってしまう。

刑事裁判のような強制力の無い民事の判決、被害者への配慮に欠けていると思います。

生命保険、そこまで自助を求めますか。

仮に疾病等により、子供保険、学資保険、生命保険への加入拒否された人は一体どうすればよいのでしょうか。

たまたま失業中で加入していた生命保険を解約したときに犯罪の被害に遭ってしまった人はどうすればよいのでしょうか。

そんな時こそ、国が助けになって欲しいと思います。一国民としても。

自分の物差しだけで書き込みをしたり、第一感情だけで事実確認も不十分なうちに書き込みをしてしまうのは危険を伴います。

言葉は命を奪う凶器となりますから。

本人を目の前にしても同じ事が言えるのでしょうか。

一歩立ち止まって冷静に発言、発信していただきたい。

ただし、人を救うことができる素晴らしい力があるのも言葉の持つ魅力です。

できるだけ人を救う道具の一つとして言葉を選んで、言葉の花束を捧げていき

いです。

犯罪被害者支援センターを通して、警察に「間違った報道がされているので訂正して欲しい」と要望したこともありました。

警察からの回答は、「警察はそんな発表はしていない。記者が勝手に取材して書いているだけ。訂正できない。」でした。

警察としたらそうですね。仕方ないと諦めるしかありませんでした。

長野県の条例制定時に、私から長野県知事に直接お願いした件なのですが、記事の訂正について、「被害者にも公費で代理人が就いていたら依頼できるのにな」と思いました。

犯人には国選弁護人なんていう制度もありますよね。

被害者の方が守られていないって、おかしいと思います。

知事は「それは大きな事だ。すぐに動け。」と、その場で指示を出してくれましたが、日弁連と協議中という理由で長野県条例は「相談」にとどまっています。

相談したときに、何かをしてもらう時に代理人契約を要し、つまり弁護士とはお金がかかるんですね。

だから公費でと要望したんです。

本年6月の法改正で、犯罪被害専門の弁護士を被害者に付けると、国は法を変えてくれました。

これは、先ほどお話をさせていただいたとおり、私が国に要望した一部です。

必ずや被害者の助けとなる法律だと、その一文だと思います。

有難いことです。

事件、事故によって、「あまりにも悲惨」「可哀想」「なんとか力になりたい」「助きたい」「自分にも何かできることはないだろうか」と思う方の活動により、義援金が集まり、経済の助けをしていただけた被害者の報道もありますが、私たちは、同情されるどころか、非難されてしまいました。圧倒的に。

この差ってなんでしょう。

何にも悪いことなんてしていないのに、責めを負ってしまっています。

悪いのは犯人ただ1人なのに。

住居の話です。

当初、自宅のある坂城町に一時避難先として町営住宅を借りることを警察を通して依頼しましたが、「加害者が暴力団員」という理由で断られてしまいました。

他の住民に危害が及ばないよとの理由でした。

それが理由となると、私たちには住む場所がないと言うことです。

暴力団は執拗です。

どこへ身を隠そうが、必ず見つけ出して報復しようとするでしょう。

次期組長と目される若頭という立場だったのですから。いわゆるお礼奉公というものです。

公営住宅の募集停止をしていたり、もう壊すことが決まっているところでも、町役場の会議室でも、一時的な避難場所は、私たちはどこでもよかったんです。

坂城町の町長も、「なんとかできないか」と担当者に問いかけてくれましたが、「できない」と答えたとその担当者から直接聞きました。

行政機関って、条例などで一文を謳われていないと何もしてくれないんです。そのように、坂城町は私たちを追い出したんです。

警察による現場検証の間は自宅には入れないです。そして、凄惨な現場となった自宅に入ることすら困難な私たち一家です。真冬ではなかったので、車の中で凌ぐことも考えていました。警察からは、3日ごとに避難先の延長されましたが、それも2週間が限度でした。

私の家は、実は父名義の土地の上に2軒建っています。父達が住む母屋と、私たちが被害に遭ってしまった別棟としての家です。

ですから、実家も避難しているんです。

皆さん、避難先と言ったらまずご実家を考えませんか。実家も私たちと一緒にどこかに避難しているわけです。7人が入れる民間アパートはあるでしょうか。

私たちは、避難先の家賃も1軒じゃないんです。市川家としたら、3軒、4軒借りたりして避難していました。でも、経済支援のお金はどこからも支給されておられません。

妻の実家は県外なので無理でした。長野県に妻の関係者はおりませんでしたので、無理でした。

坂城町と同じ理由で断られてしまう恐れを抱きながらも、アパート経営をしている知人に打診をし、借りることができましたが、「大丈夫なんだよね」と聞かれてしまいました。なんて答えればいいのか。

心の痛みが激しい妻と長男の精神科受診を予約しました。翌日、精神科の院長から電話で断られてしまいました。院長からは、「私には、患者、スタッフ、病院を守る義務がある。分かるでしょう。」と断られました。

断られた理由は、坂城町と一緒にです。さらに、「たとえ事件が解決しても、金輪際一切関わりを持つことはない、来ないでくれ」ということでした。

先程もお聞きいただいたのですが、私たちはそんなに危険な一家でしょうか。

事件から3週間後、初めて被害に遭った自宅の片付けを始めました。ようやくです。外に散らばったままの窓ガラスの破片の数々と共に、伸び放題で道路にまで横たわっている長く伸びた草。

ところが、すぐに隣人の男性が自転車に乗ってきて、私が不安を抱きながらもやっとの思いで「おはようございます」と挨拶の言葉を掛けると、亡くなった2人へのお悔やみの言葉もなく、いきなり、「何がおはようだ。何を考えているんだお前は。規制線が張られて近所の人皆迷惑をしてたんだ。謝って歩くのが当たり前だろ。隣組回って歩いたって1時間もあれば済むことだろう。何を考えているんだ。事件から何日経っていると思ってるんだ。」といきなり怒鳴られました。

私は、「この人は一体何を言い出すんだろう。」と思いました。

火事を出して挨拶回りをするのは訳が違います。「事件からなんて3週間しか経

ってねえよ。悪いのは犯人、謝るなら犯人の家族にさせろ。」と言いたかった。

こんな人がこの地にいることが悲しかったし、悔しかったです。

また、この話を聴講された方のアンケートに、「この男性の一家とのトラブルがあったからそんな風にされたんじゃないか、とてもそんなことを近隣の者が言うなんて信じられない」と書かれていたので、講演でお話するようにしているんですが、事件があるまでは隣人とは一切何のトラブルもなかったです。むしろ、一緒に消防団や公民館、自治会の活動をしてきました。

事件までは、「市川君」と呼んでくれてました。年の差があり、仲がよかったわけではないですが、何のトラブルもありませんでした。

しかし、事件後は名前で呼ばれたことは1度もないです。「お前」か「おい」です。

事件後の私たち家族の状態と心中はどうだったのか。

妻は2人の後を追いたがっていました。目が離せない。1人にはできない。

ガス、はさみ、包丁など自殺道具となる物は手元に置いてはおけない。

長男は普通に過ごしているように見えていましたが、平気なわけがありません。

「大丈夫」って言うてみたり、「まだ無理」と言うてみたり不安定なのは当然です。

まさに気が狂ってもおかしくない状態です。

警察からの緊急避難先を出なければならぬときも、「俺一人で坂城の家に住んでもいいよ。おふくろは無理なんだから、2人はどこか見つけて。」と、犯行現場の血だらけのままの家に住んでもいい。

そんなことを言うてくれていたんですよ。優しい子です。

その長男も今では坂城町の自宅に入ることができなくなっています。

心に受けた傷というのが深いということです。

「時間が経てば解決される」そんな生易しいものではないということです。

時が経つほど辛くなる。繰り返しますが、誤った情報によって被害者である私たち家族が悪者にされてしまっているんです。

事件の原因とされている。

坂城町というところには、「市川」という姓は片手で数えるほどしかありません。

すぐにあの事件の家族だとバレてしまいます。

「坂城町出身、住所、本籍地を消す、知られないようにする」「変更する」「名を変える」「私と妻が離婚して妻の旧姓にする」、私たちは、そんなふう在世間から逃れることばかり探っていました。

事件から4か月が経とうとしていた頃、「なぜ逃げなきゃいけないんだ。何も悪いことはしていない。非難されているのは誤った報道をされ、世間が勘違いをされたままだからだ」と、やっと気付くことができました。やっとです。

世間の間違った認識を解かなければ「市川」と堂々と名乗れない。そう感じてました。ちょうど4年前の今頃です。

また、せっかく借りられた借家も道路沿いで、騒音のため寝られずいたので、公営住宅を探していました。

そして、見つけたある公営住宅の職員から、「お気持ちはよく分かります。でも、

条例がないので。」と断られてしまいます。

行政では先程も申しましたが、一文が大切なんです。

事件から半年経った11月下旬の犯罪被害者週間に、地元紙である信濃毎日新聞に連載記事が載りました。

そこには事実のみ書かれ、とても助けられました。

この時の記事が、その後の私が話すときのたたき台となっていると思いますが、それ以降、いくつかのメディアで発言させていただき、だんだんと世間の認識が変わってきているように感じてきました。

ネットの書き込みを見ても、そう感じるができるものが増えています。

地元紙の信濃毎日新聞には、ことある毎に取り上げていただいておりますし、その後、NHK長野やNHK本局、読売新聞、地元紙であったり、全国版であったり、ネットでも記事を載せていただいたり、正しい記事を載せていただいております。

読売新聞の長野版では、ネットにも載っているのもので、皆様にもお読みいただけますが、「亡き子思い出辿る旅 坂城銃撃2年一緒にいる感覚 生きる力に」と題した温かい記事を書いていただいたことがあります。

この時、妻がメディアの取材に応じたんです。

後にも先にもこの時だけです。なぜ妻がそれができたのか分かりませんが、とても温かい記事なので、もしよかったらお読み下さい。

その後、TBSで再編集されたりした特集がニュース23で放送されたり、ニュース0という番組で特集を放送されたり、全国版として放送されることも多かったです。

そして、このように色々なところでお呼びいただいて、お話をさせていただくようになっているのかもしれませんが。

問題提起をしていただく記事を書いていた新聞も増えてきました。

また、テレビ東京でもWPSという全国版の番組で流していただいたり、BIZというネット配信番組でドキュメンタリーとして流していただきました。

どなたにもご覧いただけるものにもなっていますので、よかったらご覧ください。

正しい記事は、週刊新潮にも載りました。

インターネットといえば、亡くなった直人は、NEOチャンネルというハンドルネームで、YouTubeに20本ほどのモンスターの解説をしている動画をアップしていました。

私は、直人に会いたいときに見ています。

「声だけでも残してくれてありがとう。」と、そんな思いです。

妻と長男は無理といって1度も見られないでいるんですが、皆様も、もし気が向いたらNEOチャンネルに会いに行ってお話してください。

実は直人は、産声を上げたときから心雑音があり、先天性の心疾患だったのです。心臓です。

国立病院や県立長野こども病院に通院していました。

なので、「救急隊員や消防士には心臓が弱いからなれないけど、ユーチューバーなら人を笑顔にしてあげられるから動画アップを許して欲しい。」と、事件の3週間前、5月4日の朝に、私に頼んできたんです。

「そういう優しい気持ちがあるならいいよ」と許可をした動画たちです。

先程お話を聞いていただきました、「もし、先天疾患で保険加入を断られたらどうするのか」というのは、直人に現実起きていた話です。

子供保険も学資保険も、加入の審査の段階で断られてしまっていたんです。

そんな事情を知らないネットの書き込みでした。

頼りにしていた親戚から、「近所に謝って歩くことに賛成だな」と言われました。

事件直後の私たちの混乱状態を知ろうとも、分かってくれようとしもない人がいることが信じられなかったです。

その親戚には、悲しいけど、とっても寂しかったのですが、私から「さようなら」を伝えました。

これ以上傷付きたくありませんから。

報道機関からの特集の時に、プライバシー保護を無視したような、そんな申し入れをされたことがあって、傷付いたこともあって、そんな時に精神科のドクターに話をしたら、「事件後から服用している薬が、この場合にも役に立つからね。」と言われて、確かに薬は効いて、今もこうしている次第です。

「犯人はなぜご自宅を知っていたのでしょうか。」と質問してくる記者も数名いました。知りませんよ。

近所の者に質問でもしたらしいとも聞いたんですが、それが近所の誰なのかも知りませんし、真実は不明です。

私は顔を伏せてメディアに出ています。居場所も伏せています。実の父にも実は隠してきました。

妻もです。家族にも隠しています。なぜか。自殺したとみられる犯人の両親は生きているんです。そして、私たちに謝罪の一言もありません。

小学生が誰かに怪我をさせたら、保護者が付き添って謝罪をしますよね。

それが成人するとできないのでしょうか。

もしかしたら、「うちの子が死んだのは市川のせいだ」などに見当違いの逆恨みでもしているのかもしれない。

だとしたら、どんな嫌がらせをしてくるか分かりません。

突然切れて、殺しに来るかもしれません。

何の情報もありません。警察も教えてくれません。

私は別に殺されても構いません。

子育てが済んだら死んでしまう生き物もいます。

でも、私の妻は違います。

こんな辛い思いのままで命を奪われたりしないように守らねばなりません。
長男も違います。

「これから生きていつて欲しい。幸せを感じて生きて欲しい。」、その未来を守らねばならないと思っています。

その意味では、私たち被害者はどこまで行っても居場所が狭いということです。
安心できる場所がありません。

新型コロナ以降、どこへ行っても感染拡大防止のため、氏名、住所、電話番号、場合によっては身分証明書の提示やコピーを求められたりします。

宅急便の受け取りにしてもそうです。

年齢や会員特典で安くサービスを受けることも、我慢して偽名を使うこともあります。

その施設の方々はとてもいい方なので、心苦しくて大変申し訳なさでいっぱいなんですけれども、そんな窮屈な生活を今もしております。

仮に遺族の市川だと私の事を分かったとしても、知らん顔をして欲しいと思います。
近所に言いふらさないで欲しいと思います。

「被害者なんだからいいじゃない。」と言ってばらしまくる、俗に言うスピーカーおばさんがいました。放火でもされたら焼死してしまいますよ。

そっと見守っていて欲しい。

皆様は、もし当事者がいても、そのように見守るという姿勢でいて欲しいと思います。

先程も少し触れましたが、ご存じでしょうか。

強制力のある刑事裁判の判決に対し、強制することのできない民事の判決を。

司法の矛盾です。

私の所属している新あすの会が重きを置いている点、被害者には国が損害賠償額に見合う経済支援をした上で、加害者に対し国が賠償額を請求し続け、加害者の逃げ得を許さないシステムが実現すると、被害者は経済の心配をせずに立ち直るための時間が作れるようになります。

なんと言っても、経済の不安のない生活が心の傷からの立ち直りには必須です。

何も今までよりも、「もっと贅沢な暮らしをさせろ」と言っているわけではないのです。

民間の善意の寄付ばかりではなく、税金納付猶予、減額、免除などの自治体単位でしていただくことも大きな経済支援です。

地元の自治会においても、会費の免除とか出不足金の免除とか検討できますよね。

被害者が暮らしやすい社会はきっと、誰もが暮らしやすい社会だと思うんです。

名前ばかりではない、SDGs、持続可能社会、多様性を認める社会へと繋がります。年金も納付免除をしていますので、納めていない分、将来受け取る年金が減ってしまいます。

追納すると、毎月2倍の保険料です。無理です。

一括で追納できるほどの見舞金も支援金も何もないのですから、心の傷だけでな

く、年金まで、少額の未来の貧困生活が私たちには待っています。

社会への発信は、長男の名誉を回復し、長男の命を守るために始めたことですが、それは妻の命を守ることでもあります。

それができるのは私しかおりません。

さらに、県や国への要望もさせていただいたのは、お聞きいただきました。

そして、いくつかの団体等から講演依頼をいただくようになり、「依頼さえあれば応えよう、それが声を上げることのできないまま苦しんでおられるたくさんの方々のお力になるのであれば応えよう」そう決意し、今日に至り、本日もこうして皆様の前でお話をさせていただいております。

「犯人のことをどう思っているか」とそう聞かれることがあります。

なんとも思っていないです。彼の犯した犯行は絶対に許せません。

しかし、彼は最初から死ぬ気だった。

居場所を見失っていたからだろうと思います。

彼の家族を含め、社会、そういう環境を作っている今のこの日本の社会に問題があるのではないかと強く感じています。

犯人に対しては、「哀れな人生だったね」と思うくらいかな。

メディアの視点も、なぜこんな強行に及んだか、今までよりももっと加害者側へ向けて取材してくだされば、被害者はメディアスクラムと呼ばれる集中した取材攻撃で苦しめることを避けられるかもしれません。

実は、今年の正月に「お宅の長男は、元妻っていう女と一緒にになって幸せにしているの。」と聞かれるという出来事がありました。

未だにです。ショックでした。

ということは、どれだけ私がお話しして皆様に理解を求めてもやはり100%は無理にしても、まさか近所の人からそんなことを言われるなんて思ってもいなかったもので、本当にショックでした。

ということは、長男が結婚し、長男が嫁と一緒にいたら、あの元妻だと思われてしまうのでしょうか。

もし長男に子供ができたら、私が抱いていたら、「あの孫はね、あの犯人の元妻の産んだ子だよ。」とそんな風に思われてしまうのでしょうか。

誤った認識が正されないと、そういうことですね。

言葉に出さなくてもそう思っている人々が間違った認識のままの人々ってそうだと思いますよね。

とてもショックでした。

どうすればいいのだろうか分かりません。

でも、いつまでも隠れていくくはないのですけれども。

私に対しての加害者は、その主犯は、私に怒鳴ってきた隣人、私の妻にまで怒鳴ってきたその隣人夫婦です。

私の妻は、頭を銃撃され、悲鳴とともに崩れ落ちた杏菜の隣にいたんです。

その妻に向かって、「なんであんな時間に助けを呼びに来たんですか。110番すればいいじゃないですか。」と言ったんです。

あんな時間に襲われたから、あんな時間に助けを求めたんでしょう。

「110番」、どこにそんな余裕がありますか。裁いて欲しいです。

二次被害の主犯として、さらには、地域で寄り添う被害者支援とか被害者を孤立させない社会にと、そういうことに反していると思いませんか。

普段、このような面白くないと思うことがあったときによく使う話に、「どうせろくな死に方しないよ」とか「そんな奴、自分に返ってくるから痛い思いをする」なんていうことがありますよね。

ですけれども、私たちには辛い言葉になってしまいました。

お分かりいただけますでしょうか。

「2人の子を亡くしたのは、私たちが何か悪いことをして、その報いなのだろうか。」「もし前世というものがあるとしたら、そこでよっぽど悪人になったのでしょうか。」、私たちはそう思っています。

もちろん悪気は無く、気にしないでという気持ちで使われているのは分かっていますが、とても辛い言葉になってしまいました。

皆様も、被害を被って傷付いている人の前では、慎重に使っていただければと思います。

いつか「平気で使える、聞ける、そんな時が来たらいいな。」と、そう思います。

メディアでは、誰なのかを特定されないよう地域住民としましたが、私に怒鳴ってきて、ひどい言葉を浴びせたのは、この夫婦だけです。

他の地域の方々は、車の運転席から「頑張ってね」というポーズをくれたり、「あーら、市川さんじゃないの」といつも通りの接し方をしてくださったり、ありがたかったです。

この夫婦のようにならないために、今、思うことは、「知ってください。私たち犯罪被害者のことを遺族のことを、その存在を、その心を、そして理解しようとしてください。気持ちに寄り添おう。」と、そう思って下さい。

その意味では、毎年このような犯罪被害者支援に特化した催しをされている秋田県さんには感謝をします。

条例を制定して終わりではない、その後、本日のこの催しのように、どう住民の皆様にも周知していただくのが大切だと思っています。

「決して1人じゃないよ、そのことを忘れないで。」と、何人かの方にそう言っていただいたことがあります。温もりを感じることができる言葉でした。

その言葉に救われました。

その方々に救われて、ここまで、今日まで生きてこれました。

その中には、実は報道機関の方もおります。

その方々と共に生きていく。

孤独ではない、孤立しないでここまでこれた。
そして明日が来る。

長野県の長野犯罪被害者支援センターでつくっていただいたものなんですけれども、心を寄せてと、私の手記も一部載っているんですけれども、QRコードからアクセスしていただくと全文読むことができます。

皆様のお手元に配られているものなんですけれども、こういった方々と「一緒に活動をしていく」、そんな気持ちになれることができました。

そして、自助グループを立ち上げるメンバーの1人にもさせていただきました。

やはりそういう方々と共に生きていきます。

孤独ではない、孤立しないでここまで来られました。

そして明日が来る。

ご来場いただきました皆様と共に、未来に向けて歩んでいこうと思っております。
本日はありがとうございました。



5 音楽演奏 ～ 秋田県警察音楽隊



- 演奏曲
- 1 名探偵コナンより メインテーマ
 - 2 ケセラセラ (Mrs. Green Apple)
 - 3 にじ (童謡)
 - 4 昭和アイドルコレクション
 - ・ バレンタイン・キッス
 - ・ 年下の男の子
 - ・ センチメンタルジャーニー
 - ・ プレイバック part 2
 - ・ 青い珊瑚礁
 - 5 秋田県民歌

6 公益社団法人秋田被害者支援センター理事長あいさつ

本日は、犯罪被害者週間「県民のつどい」に、多数の御参加をいただきありがとうございます。

また、平素から多くの団体や個人の皆様から、私ども秋田被害者支援センターの活動に深い御理解と多大なる御支援を賜り、この場をお借りして心から御礼を申し上げます。

秋田被害者支援センターでは、犯罪被害者の方々の犯罪被害の軽減・回復に全力をあげておりますが、本日の市川武範様の御講演を拝聴させていただき、理不尽な犯罪行為によって突然引き起こされた不幸はもちろんのこと、メディアによる誤報やネット上の心ない書き込みに、どれほど深く被害者やその御家族が心を傷つけられているのかを、改めて理解いたしました。

被害者やそのご家族が、犯罪で被った辛さや苦しみの他に、謂れの無い誹謗中傷や制度の不備等で二度三度と苦しむことのない社会づくりの必要性も強く感じたところです。

市川様には勇気を持って辛い御経験をお話いただいたことに深く感謝申し上げます。

また、被害者の方々は個々に異なった困難な状況に置かれており、求める支援は、置かれた状況やニーズに応じて非常に多岐にわたっておりますので、各関係機関・団体の垣根を越えた連携や、被害者の方々との相互信頼に基づいた途切れのない支援の大切さを強く認識したところであります。

ここ秋田県は、凶悪・重大な事件が少ないと言われておりますが、現実問題として、忘れることができない不幸な事件・事故が実際に発生しており、その犯罪による被害の苦しみや悲しみにひたすら耐えている被害者や御家族がいらっしゃいます。

当センターでは、このような方々が一日も早く平穏な日常生活をおくれるよう、同じ地域社会に暮らす一人の市民として、関係機関・団体と連携して、途切れのない温かく、思いやりを持った支援活動を継続して参りたいと思います。

結びになりますが、皆様方の御健勝を御祈念申し上げますとともに、これからも当センターの支援活動に対する御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。



7 展示ブース

